

桑原隲蔵「東洋史につきて」に見る中等東洋史構想

——『中等東洋史』との異同の検討を中心に——

木村 明史

はじめに

桑原隲蔵『中等東洋史』は著名な中等東洋史教科書である¹。教科書として盛行したとは言い難いものの²、教師用・文検用参考書として通行した³。同書は中等東洋史のみならず「その内容は別として、東洋史概説書の形式はほぼこれによつて決められたとさえいえそうである」等とも評される⁴。また、『中等東洋史』は漢訳され清末・民国初の中国でも用いられた⁵。『中等東洋史』について梁啓超は「現行東洋史之最良者。惟中等東洋史 桑原隲蔵著 二冊 定価一元/此書為最晩出之書。頗能包羅諸家之所長。專為中學校教科用。条理頗整。…(略)…繁簡得宜。論斷有識」と⁶、陳慶年は「余

¹ 『中等東洋史』上・同下(大日本図書、1898)

² 桑原隲蔵『初等東洋史』(大日本図書、1899)は巻頭の弁言中で「予昨春中等東洋史を著はして、中学の教科に充てんと志し、が、巻帙や、浩瀚に失せしかば、今新に前書を省略訂正して本書を上梓し」(p.1)云々と、自ら問題点を記している。また、『史学雑誌』(13-7、1902)集報にも『中等東洋史』について「上下二冊で五百余頁あつて到底中学三年の教科書には適しない」(p.79)云々との指摘が見える。桑原教科書の概略については、拙稿「中等東洋史教科書の成立をめぐる——桑原隲蔵『初等東洋史』を中心に——」(『アジア教育史学の開拓』アジア教育史学会、2012)を参照されたい。なお、同稿は責了としたものの誤字等が多く正されずに残った。訂正については後日を期したい。

³ 宮崎市定は「桑原『東洋史教科書』が一世を風靡して行われた一方、『中等東洋史』は絶版に付せられたが、その既に市上に流通したものは、中等教員資格検定試験の参考書として手頃であるため、頗る世上に珍重された」(『解説』(『桑原隲蔵全集 第四巻』岩波書店、1968)p.768)と記す。『東洋史教科書』初版は1903年刊である。宮崎は『中等東洋史』の価格について「およそ金二円を上下していたと記憶する」云々(p.769)と記憶を記している。同時代的な記事としては、例えば『教育学術界』は、4巻3号(1902)応問では「歴史地理の文部省検定試験に於すべき参考書御教示可被下候也」との問に答えて、東洋史については「那珂氏支那通史/桑原氏中等東洋史」(p.128)等を、8巻1号(1903)疑質応答では「文部省教員検定試験地理歴史科の参考書を問ふ」に答えて、東洋史については「中等東洋史(桑原隲蔵)/那珂東洋小史(那珂通世)/支那通史(同)」(pp.116-117)等を挙げている。大日本図書も『中等東洋史』等を「高等学校の教科書若しくは中学程度に於ける教師の参考書」に適すものとしている(「文学士桑原隲蔵先生著述図書要目」(『初等東洋歴史地図』大日本図書、1901)訂正再版巻末)。なお、文検歴史科については鈴木正弘の一連の研究を参照されたい。

⁴ 松本善海「第1篇一般書(2)概説書」(『東洋史料集成』平凡社、1956)p.1

⁵ 桑原教科書の漢訳については、鈴木正弘「清末における「東洋史」教材の漢訳——桑原隲蔵著述「東洋史」漢訳教材の考察——」(『史学研究』250、2005)、黄東蘭「桑原隲蔵東洋史教科書とその漢訳テキスト——『東亞史課本』との比較分析を中心に——」(『紀要 地域研究・国際学編(愛知県立大学外国語学部)』43、2011)が概略を記している。

⁶ 『東籍月旦』(1899)第一編普通学第二章歴史第二節「東洋史(中国史附)」p.98。引用は『(重印)飲冰室合集』1(中華書局、1989)所収『飲冰室文集之四』による。

観日本所為東洋諸史庶幾其近之歟桑原隲藏之書尤号佳構所謂文不繁事不散義不隘者蓋皆得之」と評価し、「今拠以為本」としている⁷。

先行研究が『中等東洋史』で着目する点に、中央アジアの取扱いと時代区分とがある。中央アジアの取扱いについては、例えば黄東蘭は『中等東洋史』那珂通世序が「塞外(万里の長城以外の地域)の歴史、とりわけ中央アジアの歴史まで視野に入れた点を高く評価している」と指摘し⁸、「桑原隲藏『中等東洋史』は、それまでの東洋史教科書に比べて、とりわけインドや中央アジアに関する膨大な量の知識が含まれていることは指摘しておきたい」とする⁹。吉澤誠一郎も『中等東洋史』総論第一章「東洋史の定義及ヒ範囲」冒頭の一文と那珂序を引いた上で、東洋史の「特徴」を「中国史を相対化し諸民族の興亡の歴史とすること、東西交渉を重んじること」等と断じ、那珂が「世間の多くの書物は中国史を偏重して塞外の歴史にあまり触れず「東西両洋の連鎖なる、中央アジアの興亡」などは全く無視しているのに対し、桑原隲藏はその点をきちんと扱っていると称賛する」云々と主張し、以下「初期の東洋史学の特徴」のみならず「戦前の東洋史学の特徴」を論断する¹⁰。奈須恵子は「桑原の主張の中でとりわけ目立つのは、「中央亜細亜」の重視である。…(略)…そして、『中等東洋史』では、章立ての中に実際に「中央亜細亜」を多く出したことがわかる(【表3参照】)」と主張する¹¹。

⁷ 「中国歴史教科書序(光緒癸卯(1903)孟夏之月)」p. 2。引用は陳慶年編輯・趙玉森増訂『増訂中学中国歴史教科書』(商務印書館、1916年11版)による。同書「後序(庚戌(1910)三月)」にも「桑原隲藏東洋史自焚炳清訳本出於東文学社其本盛行殆偏於東南諸省慶年在武昌時見諸校印行者已有數本」(P. 1)云々とある。

⁸ 黄東蘭「東洋史の時空——桑原隲藏東洋史教科書についての一考察——」(『紀要 地域研究・国際学編(愛知県立大学外国語学部)』42、2010)p. 155

⁹ 同前p. 157。黄はこれに先立ち「インドに関連する内容」等について、藤田豊八『中等教科東洋史』・松島剛『中学東洋歴史』と『中等東洋史』の節名・頁数を比較し、『中等東洋史』の「詳細」さを主張している。「とりわけ」「膨大」とする基準は詳らかではないが、同比較によるものか。なお、「詳細」か否かは歴史叙述の質の話題であり、節名・紙幅の多寡のみを以て証とすることはできない点には、注意が必要である。

¹⁰ 吉澤誠一郎「東洋史学の形成と中国——桑原隲藏の場合——」(『岩波講座「帝国」日本の学知 第3巻』岩波書店、2006)pp. 58-61。なお、『中等東洋史』は著名ではあるが、主張に援用するためにその影響を無批判に敷衍してはならない。『中等東洋史』・那珂序を以て初期・戦前の東洋史の「特徴」まで論断するのは、論述として不適切である。東洋史の「特徴」は、個々の著述が標榜する所のみならず、実際に記された歴史叙述をも合わせて検討した上で論ずるべきものである。また、『中等東洋史』・那珂序から「中国史を相対化」等の「特徴」を見出すことが適切であるかについても、検討すべき点がある。

¹¹ 奈須恵子「一八九〇年代後半の「東洋史」教育——『哲学館講義録』を中心に——」(『井上円了センター年報』9、2000)pp. 125-126。同見解は「(2)桑原隲藏の批判と『中等東洋史』の特徴」中に記されたものではあるが、「『東洋史につきて』や『中等東洋史』によって確認」(p. 124)する旨も記している。ただし奈須は、本文に後述する通り「東洋史につきて」を『中等東洋史』の「前提」と断じており、「特徴」は両者の比較ではなく「小柳らの『東洋史』」(p. 124)との比較を中心として主張している。なお、「実際にを多く出した」とする基準は詳らかではない。表3に見える「中央亜細亜」は「章」で1件、節で4件である。例えば「朝鮮」は節で5件見える。これと比せば「中央亜細亜」は「多く出した」とは、必ずしも言えない。

時代区分については、例えば梁は『中等東洋史』を紹介するに際し「凡分全史為四期。第一上古期。漢族膨張時代。第二中古期。漢族優勢時代。第三近古期。蒙古族最盛時代。第四近世期。歐人東漸時代」と、時代区分を中心に記す¹²。傅斯年は「日本桑原隲藏氏著東洋史要。(後改名支那史要)始取西洋上古中古近古之說。以分中国歴史為四期。近年出版歴史教科書。概以桑原氏為準。未見有變更其綱者」云々と、その時代区分が中国歴史教科書に与えた影響に言及し、桑原の時代区分を批判し、新たな時代区分を提示する¹³。宮崎市定は「桑原博士の時代区分の根拠は甚だ明瞭であって民族勢力の盛衰興替をその標準にとる。上古は漢民族の膨張の時代、中古は漢族が塞外民族と衝突競争するが、優勢を示す時代、而して近古は五代の遼に始まり蒙古族が優位を占め、明代にもなお中国に脅威を与える存在であったので、蒙古族極盛の時代と称する。次に清代には西欧人が東漸してアジアの大部分をその植民地と化し、中国も結局その侵略を蒙るに至ったので、これを欧人東漸の時代と見るのである」と断じ¹⁴、また、「…(略)…桑原博士の時代区分は、唐と宋との間に一の時代的断層を認める点が特色をなし、これは後に内藤湖南博士によって唱えられた宋以後を近世とする学説と暗合する。そしてこの唐宋間変革説が京都を中心とする学界に保存され、世界に対しても大きな影響を及ぼすようになったのは周知の事実である」と述べ¹⁵、「暗合」と表現するに止めるものの、所謂唐宋変革論との関係を仄めかす。黄は「漢族膨張時代」等の時代区分について、「表現が示しているように、桑原隲藏の『中等東洋史』は中国歴史上漢民族と周辺諸民族との争い、さらにヨーロッパ人の勢力がアジアに進出してからアジアとヨーロッパの争いに焦点を当てて、民族／人種間の勢力消長に歴史の流れを把握しようとしている」と論断する¹⁶。田中比呂志は「『中等東洋史』では、…(略)…表2のように「周圉諸邦国の興亡、諸民族の盛衰を参考」にして上古期、中古期、近古期、近世期と時代区分され、…(略)…大陸における民族の角逐とそこで優勢を占めた民族の盛衰が指標とされている。別言するならば「中国史を相対化して、諸民族興亡の歴史とすること、東西交渉をおもんじること」⁽¹²⁾がその背景にあるのである」と断じる¹⁷。

¹² 前掲梁『東籬月旦』p. 98

¹³ 傅斯年「中国歴史分期之研究」(『北京大学日刊』1918. 4. 17。引用は人民出版社影印本(1981)による)。「中国歴史分期之研究」は同「(統)」として23日まで連載され、桑原とは異なる時代区分を提示する。以下本稿では出典を示すに際して「(統)」の有無は特に記さない。引用中に見える『東洋史要』は『中等東洋史』の漢訳教科書である。なお、桑原の時代区分が中国教科書に与えた影響について、例えば汪榮宝編・張元濟校訂『中学中国歴史教科書』(商務印書館、1909年初版。引用は1910年再版による)本朝史緒論には「日本文学士桑原隲藏。嘗批中国本部之大勢…(略)…其義具詳所著東洋史要。今姑用其説。大別国史為四部」(p. 2)とある。

¹⁴ 前掲宮崎「解説」p. 764

¹⁵ 同前同頁

¹⁶ 前掲黄「東洋史の時空」p. 150

¹⁷ 田中比呂志「清末における中国歴史教科書編纂」(『東京学芸大学紀要 人文社会科学系 II』63、2012)。註(12)には前掲吉澤「東洋史学の形成と中国」を附している。しかし、吉澤の「中国史を相対化」云々の主張は、田中とは異なる叙述を参照してなされている。田中が吉澤と異なる検討を経て同一の見解に至ったのであれば、「別言する」のではなく、論証過程を示さねばならない。なお、田中論考は

以上のように、中央アジアの取扱い・時代区分に『中等東洋史』の「特色」「特徴」を見出す者もあり、時にその影響が語られる。しかし、これら主張は、往々『中等東洋史』那珂序・弁言・総論等のみを参照してなされ¹⁸、『中等東洋史』の歴史叙述をほぼ検討していない。従って、これらは『中等東洋史』に掲載された那珂・桑原の中等東洋史構想についての見解と評すべきものであろう。桑原が『中等東洋史』を編著するに際して、どのような中等東洋史構想を示していたかもまた、詳細に検討されるべき課題である¹⁹。しかし、『中等東洋史』に限定した考察では、「特色」「特徴」までは明らかにし得ない。

桑原は『中等東洋史』刊行の前年に「東洋史につきて」を発表している²⁰。奈須は同稿を「『中等東洋史』執筆の前提」とみなす。しかし、同稿に示された中等東洋史構想は、中央アジア・時代区分について『中等東洋史』に示されたそれと異同がある²¹。

極めて杜撰である。同稿の種々の問題については木村・鈴木正弘「清末中国歴史教科書研究の基礎確立に向けて——田中比呂志「清末における中国歴史教科書編纂」の諸問題——」（『教育社会史史料研究』5、2013）で指摘した。後に田中は「清末における国民形成のゆくえ——中国歴史教科書のいくつかの語を素材として」（孫江・劉建輝編著『東アジアにおける近代知の空間の形成』東方書店、2014所収）で拙評に言及し、「該論文以前においてすでに拙論は事実関係等についてはかなりの修正をほどこしていたが、指摘を受けた部分については言及しておいた。それ以外の部分（方法論）については今後の議論に委ねたい」と主張する。しかし、標榜する所に反してほぼ「言及」はなく等閑に附し、先行研究の成果を詐って記す等旧稿と同様の問題を内包し続けている。研究史理解を攪乱し研究深化を妨げる行為であるため、記して注意を喚起したい。なお、拙評は「方法論」の語を用いていないが、「おわりに」において「先行研究、資史料、時系列の取り扱い」の重要性は指摘した。これらは歴史研究において「今後の議論に委ね」る必要はない。同稿の諸問題については、木村・鈴木「田中比呂志「清末における国民形成のゆくえ」における拙評への「言及」を巡って」（『教育社会史史料研究』7、2014）を参照されたい。なお、田中は上掲2稿の間に「清末民初期の中国における「民族」概念の消長——自国史教科書の言説を中心に」（平成24年度広域科学教科教育研究経費報告書『歴史教育における民族の問題』所収）を発表している。同稿については、木村・鈴木「既発表著述の再利用は研究業績たり得るか——田中比呂志「清末民初期の中国における「民族」概念の消長」と既発表著述の比較を通して——」（『教育社会史史料研究』7、2014）中で「清末における中国歴史教科書編纂」等旧稿を再利用したものであり、旧稿との「関係を一切示すことなく、旧稿と同一の時代背景理解に基づき、旧稿と同一の課題設問を發し、旧稿と同一の着目点によって、旧稿と同一の結論に至るものであり、新たな資史料を用いず、新たな視点による資史料の再検討も行」（p. 21）っていない不適切な「研究」である旨を明らかにした。詳細は同批評を参照されたい。

¹⁸ 『中等東洋史』が那珂序に記され通りの性格を有するかについては、検討を要する。前掲黄「東洋史の時空」が、那珂序について「しかし、桑原隲蔵の『中等東洋史』とそれに先だって出版された東洋史教科書とを比較すれば、那珂のこの指摘に偏りがあると言わざるを得ない」と指摘し、児島献吉郎・藤田豊八教科書との比較を行い具体例の幾つかを示しているのは、特筆すべきである。

¹⁹ 示す所の構想が『中等東洋史』の歴史叙述・編集に貫徹しているかについては、別途検討を要する。

²⁰ 「東洋史につきて」（『東洋哲学』4-1、1897）・「東洋史に就きて（承前）」（同4-5、1897）。以下本稿では、引用に際して出典頁を示す場合を除いて、両者を総じて「東洋史につきて」と記す。

²¹ 前掲奈須「一八九〇年代後半の「東洋史」教育」は、「東洋史につきて」を「『中等東洋史』執筆の前提となる」（p. 124）ものと断じる。「東洋史につきて」は『中等東洋史』よりも先に発表されたものであることは事実である。しかし、本文に後述する通り、『中等東洋史』は「東洋史につきて」の構想をそのまま引き継いだものではなく、「東洋史につきて」を「前提」とするとまでは言えない。両者の異同に注意を払わずに「桑原の主張した新しい「東洋史」のあり方」（p. 124）を論断することは適切とは言えない。

本稿では、「東洋史につきて」『中等東洋史』が示す中等東洋史構想について、主として中央アジアの取扱いと時代区分とについて、その異同に着目して検討を試み²²、『中等東洋史』に示された桑原の中等東洋史構想の位相を理解する一助としたい。

I 中央アジアの取扱いについて

まず、「東洋史につきて」に示された中等東洋史構想における中央アジアの意義について確認しよう。桑原は東洋史について、

阿利安人種、殊に独逸、拉典人種の発達のみを叙述して、世界史の能事終れりとなすが如きは、今や已に業に過去の妄想に属しぬ。…(略)…遂に千八百六十年に至りて、独逸の東洋学者、「コイフェル氏は、支那、卵度、を中心として、東方亜細亜一帯の沿革を叙述し『東亜史』Geschichte der Ost-Asienと題し、上中下の三巻に分ちて世に公にせり。これ蓋し西欧に於ける所謂東洋史の先鞭たるもの。…(略)…我国に在りては、当初中等教育に於て、歴史を国史、支那史、万国史の三部に分ちしが、爾来先覚諸氏の間、万国史の名実共に允当を失することを主張する者ありて、遂に明治二十七年に至りて、中学の課程を改め、国史の外、世界史を分ちて、東西両洋史となせしより、東洋史なる名称は、遂に一般に今日に慣用せらるゝに至れり。／西洋史は主として歐洲及其附近一帯に於ける古来の沿革を明にし、而して東洋史は之と相對峙して、世界の大勢変遷の跡を繙ぬるを以て其目的となすが故に、其範圍は支那朝鮮は固より汎く印度及篤蘭斯、烏滸薩尼耶をも包括せざるべからず。大日本教育會雜誌の示す所と云ひ、又今日に公にせられたる諸東洋史の記する所と云ひ、其範圍に於ては、「コイフェル」氏の『東亜史』と何等の異同なきなり。(「東洋史につきて」 pp. 12-13)

と記す²³。東洋史は西洋史と「相對峙して、世界の大勢變遷の跡を繙ぬるを以て其目的となす」とする。その範圍は支那・朝鮮・インド・「篤蘭斯、烏滸薩尼耶」をも「包括」するとし²⁴、これは「大日本教育會雜誌の示す所」と「異同なき」ものと見解を示している。「大日本教育會雜誌の示す所」とは「尋常中學校歴史科ノ要旨」(『大日

²² 前掲奈須「一八九〇年代後半の「東洋史」教育」は「東洋史につきて」について「先述のように、この後、「東洋史」教科書のスタンダードとなつていったとされる『中等東洋史』であるが、桑原は実は一八九七年の『東洋哲学』に、その『中等東洋史』執筆の前提となる「東洋史につきて」という論稿を発表した(『東洋哲学』第四編第一号・第三号、一八九七年三月二〇日・五月二〇日)⁽¹¹⁾(p. 124)とし、註(11)では桑原の経歴等を記したのに続けて、「東洋史につきて」について「『中等東洋史』執筆直前の桑原の「東洋史」構想を知る上では欠かせない内容と考えられる」(p. 133)と見解を記している。しかし、本文では「ここでは、そうした桑原の主張した新しい「東洋史」のあり方を、「東洋史につきて」や『中等東洋史』によって確認し」(p. 124)云々と記し、以下、「(一)「東洋史」の範圍」「(二)「東洋史」の時代区分」の節を設け、後者において「東洋史につきて」『中等東洋史』から上古から近世に至る時代区分の名称等を引くが、「これが『中等東洋史』になると、…(略)…の四期に分けた時代区分を示すに至っている」(p. 127)とするのみで、両者の異同を具体的に比較検討しない。なお、『中等東洋史』の執筆開始時期は未詳であり、「東洋史につきて」が「『中等東洋史』執筆直前の桑原の「東洋史」構想を知る上では欠かせない内容」であるかは、明らかではない。

²³ 「コイフェル」氏はJohann Ernst Rudolph Kaeuffer、「『東亜史』Geschichte der Ost-Asien」は『Geschichte von Ost-Asien : für Freunde der Geschichte der Menschheit』を指すものか。

²⁴ 「篤蘭斯」「烏滸薩尼耶」にはそれぞれ「トランス」「オキサニヤ」とルビが附されている。「東洋史につきて」中では読点を附す例と附さぬ例が混在する。両者をあわせてトランスオクシアナを指すものであろう。

本教育会雑誌』157、1894)の「示す所」の意であり、本要旨は「西洋歴史ト相對シテ世界歴史ノ一半ヲナス」云々と東洋史を規定する。しかし、桑原は、既存の世界史構想に、必ずしも同意しない²⁵。

然れども吾人はこの東洋史の範囲につきて、多少の意見を有せざるにあらず。…(略)…抑々亜細亞大陸は、其地勢によりて之を大別して、東西南北の四部となすべし。葱嶺の東、阿爾泰の南、喜馬拉耶の北、即所謂東方亜細亞に於ける邦国の興凶、民族の盛衰は、彼此互に親密なる關係を有するを以て、之を一の史的団体となすは、極めて允当なるべしと雖ども、之に南方亜細亞即印度を加へて、其大勢沿革の次第を、一歴史中に瞭然たらしめんとするが如きは、頗る困難のことたるを知らざるべからず。支那と印度との間に於ける直接の關係は、極めて寥々たるものなり。仏教の傳播は姑く措き、其政治上の關係に至りては、…(略)…四千年間又何等直接の關係を有せず。而して此等の事變も、其實皆一時偶発のもの、従ふて其彼此の間に及ぼせし影響の如きも、亦固より深く考察するに足るものなし。之に反して…(略)…印度は終始葱嶺以西の諸邦國と、親密なる關係を有するを以て、寧ろ之を葱嶺以西の史的団体中に加へて、其變遷を叙述すること、頗る允当なるもの、如し。(「東洋史につきて」 pp. 13-14)

とある。ここでは「亜細亞大陸」を「大別」して「東西南北の四部とな」しており、中央アジアを想定していない。「大別」した中で東方アジアについては「一の史的団体となすは、極めて允当なるべし」とみなすものの、東方アジアに「南方亜細亞即印度を加へて、其大勢沿革の次第を、一歴史中に瞭然たらしめんとするが如きは、頗る困難のことたるを知らざるべからず」として、東方アジア・南方アジア(インド)を「一の史的団体」とはみなし難い旨を述べている。以下、東方アジアのうち支那に限定した考察を示し、「仏教の傳播」については一先ず留保するものの、支那とインドの「直接の關係は、極めて寥々たるもの」「事變も、其實皆一時偶発のもの」として、「彼此の間に及ぼせし影響の如きも、亦固より深く考察するに足るものなし」と断じ、且つインドは支那よりも「終始葱嶺以西の諸邦國と、親密なる關係を有する」として、西方アジアとの關係に着目する。

桑原は、以上のように既存の東洋史の範囲を「一の史的団体」として扱うことの困難を指摘した上で、

吾人は以上の理由よりして、若しなし得くんば、今日所謂東洋史の範囲中より、印度を除き去り、新に一の史的団体を建設せんことを希望するものにして、…(略)…故に吾人は葱嶺を以て、東西史的兩団体の分水嶺となし、従ひて其名称の如きも、亦改めて葱嶺以東は東亞史、以西は西亞史となし、之に西洋史を加へ、此歴史的三大団の變遷の跡を明にし、以て完全なる世界を組織せんと欲するものなり。(「東洋史につきて」 pp. 14-15)

と記し、既存の所謂東洋史の範囲から「印度を除き去り、新に一の史的団体を建設せんことを希望する」と言明する。そして、パミール以東を東亞史、以西を西亞史に分

²⁵ 「尋常中学校歴史科ノ要旨」は東洋(歴)史について「支那ヲ中心トシテ東洋諸國ノ治乱興亡ノ大勢ヲ説クモノニシテ」云々と記し、必ずしも「範囲」を具体的には示していない。桑原が示す理解は「教授ノ事項順序」の「大略」として示された内容も考慮したものであろう。

け、西洋史・東亜史・西亜史の三つの「史的団体」鼎立による世界史を構想する²⁶。
しかし、桑原は前述した世界史構想に必ずしも拘泥はしない。

吾人が東洋史の範囲に関する意見は、上述の如しと雖ども、もとこれ浅学薄識の少壯者が一家言、姑く先覚諸氏の一考に供するのみ。今日已に中学の課程に於て、世界を分ちて、東西両洋史となす以上は、此分類法を循奉するは、固より当然のことにして、余も亦必しも絶対的に此分類法を非難せんとするものにあらず。支那と印度との関係は頗る間接なりと雖ども、篤蘭斯、烏滸薩尼耶と葱嶺以東の地との関係に至りては、時に意外の親密を見ることあり而して篤蘭斯、烏滸薩尼耶と印度とは、上已に論述せしが如く、終始親密なる関係を有するが故に、若し篤蘭斯、烏滸薩尼耶を彼此の連鎖として、東南両亜を一の史的団体中に叙述せば、其欠点の幾分を補綴すること必しも難事にあらざるべし。吾人は斯に姑く在来の分類法に循ふ人々に対しては、特に中央亜細亜の沿革を、軽々に看過するなからんことを勧告するものなり。（「東洋史につきて」 p. 15）

とあり、従前の自らの意見は一先ず措き、「今日已に中学の課程に於て、世界を分ちて、東西両洋史となす以上は、此分類法を循奉するは、固より当然のこと」として、「尋常中学校歴史科ノ要旨」に既定の東洋史に従うことを肯定する。そして、東方アジアと南方アジアは「一の史的団体」と見なし難いとしても、「篤蘭斯、烏滸薩尼耶を彼此の連鎖として」既定の東洋史という「一の史的団体中に叙述」すれば「其欠点の幾分を補綴すること必しも難事にあらざるべし」と見解を示し、「中央亜細亜の沿革を、軽々に看過するなからんことを勧告する」のである。この構想を示すに至って、アジア大陸四分時には見えなかった「中央亜細亜」の語が始めて登場することは、注目に値しよう。「東洋史につきて」における中央アジアは、アジア大陸を「其地勢によりて之を大別し」た結果ではなく、「一の史的団体」と見なし難いものを、既定の東洋史中に叙述する必要から、新たに注目された地域概念なのである。

桑原は更に、

今や此稿を終るに際し、現今世に公にせられたる東洋史と、現今中学に於ける東洋史教授の状态とに就きて一言する所あるべし。…(略)…然れども今日の東洋史の最大欠点は、一般に中央亜細亜の沿革を忽諸に附するに在り。吾人が上已に論述せしが如く、印度と支那との唯一の連

²⁶ 桑原の提案する「西亜史」の範囲は未詳である。「今日所謂東洋史の範囲中より、印度を除き去り、新一の史的団体を建設せん」とする構想には先例があり、桑原も「坪井博士曾て宮本学士の『東洋歴史』に序して、須らく世界史を分ちて、三大部となすべきを主張せられたるは、大体に於て吾人の賛同せんと欲する所なり。…(略)…今日所謂東洋史の範囲中より、印度を除き去り、新一の史的団体を建設せんことを希望するものにして、此点に就きては、坪井博士の諸説と、毫も相違する所なし」(「東洋史につきて」 pp. 13-14)と明記している。「坪井博士」は坪井九馬三、「宮本学士」は宮本正貫である。桑原は坪井が疏勒・莎車・焉耆・龜茲諸国を「支那の周圍部となさず、反つてこれを阿刺比亞、波斯と同一の史的団体中に叙述すべしと、主張せらるゝに至りては、不幸にして、吾人の未だ容易に首肯能はざる所なり」とし、「吾人は葱嶺を以て、東西史的兩団体の分水嶺とな」（「東洋史につきて」 pp. 14-15）す云々と異見を提示している。坪井はインド・イラン等の歴史を「到底之ヲ東洋史若クハ西洋史ノ周圍部トシテ具叙スヘクモアラス」として、イラン歴朝を「中央部」、インドのみならずギリシア・ローマ・小アジア諸国、蒙古種族等の歴史を「周圍部」とする「西域史」設置を「未だ成熟セルモノニ非ス」としつつ提起している（「東洋歴史序」（宮本『東洋歴史』上巻（富山房、1895）pp. 7-8））。桑原の「西亜史」と坪井の「西域史」との異同については、なお検討を要する。

鎖は、中央亜細亜を俟ちて後始めて完全となるものなり、東洋なる史的団体中に属する、諸邦国彼此の関係を明にせんと欲せば、必ず先づ中央亜細亜の沿革を考察せざるべからず。…(略) …然るに今日東洋史の著者は、一般に中央亜細亜の沿革を度外に置くか故に、其体制頗る整然を欠くなき能はず、彼等は東洋史は一般歴史なりと公言すれども、然も著書に就きて其實際を顧みれば、時に各国史の襍合体に過ぎず。…(略)…吾人は東洋史の著者に、今少しく其意を、中央亜細亜の沿革に注がんことを勧告する者なり。(「東洋史に就きて(承前)」 pp. 123-125)

とも記す。「印度と支那との唯一の連鎖」である中央アジアは、インド・支那のみならず、東洋史の対象たる邦国の関係を明らかにするに際しても、その沿革の考察が必要である旨を述べる。そして、既存の東洋史著作は、中央アジアの沿革を度外視しているために一般歴史として東洋史を描けず、「各国史の襍合体に過」ぎない場合がある旨を指摘する²⁷。

他方で桑原は「中央亜細亜の沿革」を扱う難しさについて、

中央亜細亜に於ける邦国の興亡、民族の盛衰は、頗る多様にして然も其材料実に関如せるを以て、其沿革を明にして復遺憾なからしむるが如きは、到底之を今日に望むべからずと雖、已に独逸の「ラッセン」氏は、『斯幾天人種史』を著し、奥太利「ヴァンヴェリ」氏も、『布哈爾史』を公にし、而して仏蘭西の「レミュサ」氏は更に『和蘭史』を作りし由なれば、此等類似の諸書に参考せんか、中央亜細亜の沿革に就きて、或は意外の光輝を発見し難きにあらざるべし。(「東洋史に就きて(承前)」 p. 125)

とも記している。桑原は研究書公刊を伝え聞き「中央亜細亜の沿革に就きて、或は意外の光輝を発見し難きにあらざるべし」と可能性に期待を示しはするものの、「其沿革を明にして復遺憾なからしむるが如きは、到底之を今日に望むべからず」状況を自覚している。「東洋史につきて」において中央アジアは、必要から注目されはしたものの、他方で未だ「沿革」を明らかにすることすら望み難いと思なされたのである。

以上、「東洋史につきて」に示された桑原の世界史構想から見れば、中央アジアは必ずしも重要なものではなかった。しかし、既定の東洋史に従うならば、東方アジアと南方アジアとを東洋史という「一の史的団体中に叙述」する必要が生じる。それ故に、研究の進展等を一先ず考慮の埒外としてでも、東・南方アジアの「唯一の連鎖」として中央アジアに着目せざるを得ず、中央アジアは中等東洋史構想に意義を占めたのである。

次に、『中等東洋史』が示す中等東洋史構想において、中央アジアをどのように意義付けているか確認しよう。

桑原は、総論第一章「東洋史の定義及ヒ範囲」において、

東洋史とは、主として東方亜細亜に於ける、民族の盛衰、邦国の興亡を明にする、一般歴史にして、西洋史と相並んで、世界史の一半を構成する者なり。今山川の形勢に因り、亜細亜大陸を分つて五部となすべし。(p. 1)

²⁷ 一般歴史としての東洋史について、報告者は総合歴史教育研究会大会(平成26年8月30日於桜美林大学四谷キャンパス)において「初期中等東洋史における日本の取扱い」と題した口頭発表の中で論及した。同発表に基づく論文は執筆中である。

と記し、以下、アジア大陸を東方・南方・中央・西方・北方に五分する。「東洋史につきて」では、アジア大陸を四分し、後に必要から中央アジアを加えおり、構想に異同がある。また、東洋史を「主として東方亜細亜に於ける、民族の盛衰、邦国の興亡を明にする、一般歴史」と規定しており、インドを排除するものではないにしても、東方・南方アジアが「一の史的団体」であるか否かには殊更に言及しない点も、「東洋史につきて」とは異同がある。『中等東洋史』は中等東洋史の教科用図書として編著されており、既定の東洋史に従うことは与件であったのであろう。

桑原は更に、

東洋史は主として、東方亜細亜に於ける、古来の沿革を明にすれども、亦同時に之と幾多直接の関係ある、南方亜細亜及ヒ中央亜細亜の沿革をも略述せざるべからず。北方亜細亜に至りては、気候寒烈にして、人煙も亦稀少、従ふて東方亜細亜の大勢に、大関係ある事変の舞台とならず。西方亜細亜は、寧ろ歐洲の大勢と分離すべからざる関係を有するが故に、共に東洋史の範囲以外に在り。(pp. 2-3)

と、再度東洋史の対象範囲を「主として、東方亜細亜」と明記し、南方アジア・中央アジアはこれと「直間接の関係ある」ものとし、「沿革をも略述せざるべからず」とする。南方アジアは「東洋史につきて」では東洋史に「包括せざるべから」ざるものであったのに対し、『中等東洋史』では「略述」の対象とされ、その扱いには異同がある²⁸。

桑原は中央アジアについて総論第二章「地勢」において、

後印度の西は即チ印度なり。…(略)…元来印度の北辺は、喜馬拉耶山脉ありて、凶伯特方面との交通の道を塞ぎ、其東方には古来大国興らざるが故に、其国の変動は常に西北方より起る。印度の西には、印度河を阻て、卑路芝斯坦あり。卑路芝斯坦の北は、即チ阿富汗斯坦なり。南方亜細亜と、中、西両亜細亜との関係は、必ず此印度河流域の方面より来る。／中央亜細亜の地は、其位置亜細亜大陸の中央に当るが故に、東に西に、大帝国の興起するに遇へば、早晩其直接の影響を受け、歴史上尤モ重要なる位置を占むるのみならず、蒙古地方に失敗せる、漂泊人種は、常に此地方に向ふて移転して国を建て、其漸く遊情に流れて、殺伐の気風を失ふと共に、又後来の漂泊人種に其国を奪はれ、或は西方亜細亜に逃れ、或は南して、印度に入り、転々此の如くして、中央亜細亜一帯の地は、実に複雑にして多様な事変の舞台となれるを以て、西、南両亜細亜と、東方亜細亜との関係を明にするに於ても亦、極めて重要なる位置を占むべきなり。(pp. 12-13)

と記す。中央アジアを「西、南両亜細亜と、東方亜細亜との関係を明にするに於ても亦、極めて重要なる位置を占むべきなり」とし、「東に西に、大帝国の興起するに遇へば、早晩其直接の影響を受け、歴史上尤モ重要なる位置を占むる」云々と意義を記す。「東洋史につきて」では、中央アジアは東方アジアと南方アジアとの「唯一の連鎖」とされた。しかし、『中等東洋史』に示された構想では、東・南方アジアのみな

²⁸ 前掲奈須「一八九〇年代後半の「東洋史」教育」は同文を引いて「「南方亜細亜」と「中央亜細亜」の沿革もあわせて扱うこと…(略)…が示されている」(p. 125)とみなし「略」字に着目せず、「東洋史につきて」と『中等東洋史』の異同を看過する。桑原の構想と「支那、印度、を中心として、東方亜細亜一帯の沿革を叙述し」た「『東亞史』」との連関は、検討を要す課題であろう。

らず、西方アジアとの関係も明示する。『中等東洋史』は西方アジアを「寧歐洲の大勢と分離すべからざる関係を有するが故に、共に東洋史の範囲以外に在り」とし、東洋史の範囲外で寧ろ歐洲との関係を言明している。このように、歐洲と関係する西方アジアと東・南方アジアとの「関係を明にする」においても中央アジアが「重要な位置を占」めるとする意義付けは、「東洋史につきて」とは異同がある²⁹。

那珂は桑原『中等東洋史』に叙をよせ、

近年東洋史の書、世に行はるゝ者頗る多けれども、皆支那の盛衰のみを詳にして塞外の事変を略し、殊に東西両洋の連鎖なる、中央亜細亜の興亡の如きは、全く省略に従ふが故に、亜細亜古今の大勢を考ふるに於ては、不十分なることを免れず。予常に之を憾とせり。此頃文学士桑原隲蔵君中等東洋史を著はして予に示せり。予受けて之を読むに、史料を東西に取りて博引旁搜し、善く東洋民族の盛衰消長、列国の治乱興亡を述べ、簡にして要を得たり。予良書の世に出づるを喜び、一言を題して之が序となす。(「中等東洋史叙」 pp. 2-3)

と記している。「殊に東西両洋の連鎖なる、中央亜細亜の興亡」なる見解は、先に見た『中等東洋史』における桑原の中央アジアの意義付けと一脈通じる点がある³⁰。

以上、「東洋史につきて」『中等東洋史』が示す中等東洋史構想における中央アジアの取扱いを比較すると、前者では既定の東洋史の範囲にある東方アジアと南方アジアとを「一の史的団体中に叙述」する必要から、「唯一の連鎖」として中央アジアに着目せざるを得ず、これらを「包括せざるべから」ざるものとした。後者では東洋史の対象範囲を「主として東方亜細亜」とし、中央アジア・南方アジアは「之と幾多直間接の関係ある」ものであり「略述」の対象とされ、「一の史的団体」であるかについて、特に異論を示さない。また、後者では中央アジアと西方アジア・西方アジアと歐洲との関係を述べることで、中央アジアは東洋西洋に及ぶ意義を付されている。

²⁹ 「東洋史につきて」にも「…(略)…(元時代に於ける地理家は例外)皆葱嶺が実に東西両亜交通の一大障壁たるを証明して余あるにあらずや。故に吾人は葱嶺を以て、東西史的両団体の分水嶺となし」(p. 15)云々とあり、中央アジアと西方アジアの関係を考慮していないわけではない。ただし、「東洋史につきて」では、例外を認めるものの「分水嶺」としており、『中等東洋史』のように西方アジアと東方アジアとの「関係を明にするに於ても亦、極めて重要な位置を占むべき」とまでは言明しない。「東洋史に就きて(承前)」では「独東洋と西洋と、若くば東洋諸国相互の間に於ける交通貿易の如きは、決して之を軽々看過すべきにあらず、交通貿易は彼此の文化が相影響するに於て、最有力なる媒介者たればなり。西暦紀元前後に於て、希臘人羅馬人等は遠く万里の波濤を凌ぎて、支那の南海に來りて貿易に従事し、尋いで紀元三四世紀の頃、支那の商船は錫崙を経て時に波斯湾を出入し、摩哈默德教国の勃興と共に、亜刺比亜人は番禺(今日の広東)に來りて、宏壯なる商館を開きて商業を営み、宋元の際に在りては、杭州、福州の地は、當時の世界の交易の一大中心たりしことを知らざるべからず」(pp. 124-152)と見解を示している。ここで桑原が例示する東洋諸国間・東洋と西洋との交易は、いずれも中央アジア經由の陸路ではなく海路である。なお、本文に後述する通り、時代区分を示すに際しては「蒙古人種」について「余威遠く歐洲大陸に及」んだとする叙述が見える。

³⁰ 那珂「中等東洋史叙」は『中等東洋史』を「簡にして要を得たり」「良書」(p. 3)等と評している。しかし、那珂が「予常に之を憾とせり」(p. 2)とする種々の点について、『中等東洋史』がどのように解消しているかについては、明示しない。那珂の「称赞」を理由として『中等東洋史』が那珂の構想を体現したかのように扱うのは軽率である。

II 時代区分の取扱いについて

本節では、「東洋史につきて」『中等東洋史』に示された中等東洋史構想における時代区分の取扱いについて確認しよう。「東洋史につきて」『中等東洋史』ともに上古・中古・近古・近世の四時代区分を採る³¹。以下、各区分についての見解を対照し、検討しよう³²。

「東洋史につきて」	『中等東洋史』
(第一)上古期 開化人種膨張時代	(第一)上古期 漢族膨張時代(皇紀四百四十年以前)
太古より大凡西暦紀元前三世紀に至る、即支那にありては開闢より、秦始皇が六国を統一するに至る間を指す、姑く便宜の爲め、之を開化人種膨張時代と云ふべし。此世期に於ては、東洋文化発達の上に、最も主要なる地位を占むべき 二大人種、即支那人種と印度人種 とが次第に其勢力を増進せし時代にして、支那に在りては支那人種が、西方天山南路の地より、次第に渭水のの上流に沿ふて支那本部に入り、遂に黄河附近に其根拠を定め、三皇、五帝、三代を経て、中央集権の基礎漸く固く、或は荆蛮を懲して地を南に拓き、或は氏羌を征して境を西に広め、所謂 支那人種 なるもの、勢力、次第に膨張せし時代なり。印度に於ける事情も亦此の如し、印度人種が 阿利安人種 の故郷地たる、西爾、阿母両河の間より、次第に南下して、先づ印度河上流の地に繁殖し、摩訶波羅多及羅摩耶那によりて、当時の髣髴を想見し得るが如く、日種、月種の王族は、次第に其勢力を恒河の流域に及ぼし、遂に度羅毘陀人種を賈都耶以外に駆逐し去れり。	太古より 秦の一統に至る間をいふ。 此間に在りて、東洋史中一切の 事変 に於て、最も重要なる位置を占むべき 漢族 は、 支那北部の地に抛り、 三皇、五帝、三代を経て、中央集権の基礎漸く固く、遂に秦の始皇出で、始めて鞏固なる一統政治を建てたり。要するに此時代に於て、 漢族 の勢力次第に膨張し、 早晚塞外諸族との、衝突を免れざるに至りしが故に、姑く之を漢族膨張時代といふべし。
加之此世期の末に當りて、支那に於ても印度に於ても、其哲学的思想は著しき発達をなし、支那に	

³¹ 「東洋史につきて」には「…(略)…吾人は先づ支那に於ける変遷を根拠とし、傍ら東洋諸邦国殊に印度の大勢に参考して、姑く東洋史の時代区分を次の如く分割せんと欲するものなり」(p. 17)とあり、『中等東洋史』総論第四章「時代の分割」にはこれと類似する「今姑く支那本部の大勢を中心とし、之と関係せる周囲諸邦国の興亡、諸民族の盛衰に参考して、東洋史の時代を、左の四期に分つべし」(p. 18)という表現がみえる。両者を比較すると後者は「殊に印度」の表現を欠く。しかし、この点のみを以て両者の「印度」の取扱いの異同を断じることにはできない。「東洋史に就きて(承前)」も四時代区分案を示すに際して「支那に於ける変遷を根拠とし、傍ら東洋諸邦国の大勢に鑑みて」(p. 120)と記し、「殊に印度」と明記しないことはある。「印度」の取扱いについては、これら表現にのみ着目することなく、具体的事例の検討を要する。なお、「東洋史につきて」『中等東洋史』ともに時代区分を行うに際して「姑く」と記し、暫定的なものとしている点には、注意が必要であろう。

³² 以下、「東洋史に就きて(承前)」pp. 120-124・『中等東洋史』総論第四章「時代の分割」pp. 17-21に示された時代区分とその解説を対照する。着目した異同箇所はゴシック表記とした。作表に際しては比較検討の便宜を優先した。そのため、対照は厳密を旨とはせず、レイアウト等も適宜改めた。

<p>於ては道家、墨家、法家、名家以下、所謂九流百家の説鬱然として其間に勃興し、各其長短を競ひ、而して孔子其間に出で、儒家の源を開きしが如く、印度に在りても僧位、尼夜耶、闍伊那、衛世師、弭曼娑、吠檀達以下の諸哲学派前後崛起して互に論難弁駁し、仏教の祖師たる釈迦牟尼も亦、正に此時に當りて、印度に現出せり。故に或は此世期を分ちて、哲学思想發達の時代を置くも、亦甚しき大不可なきに似たり。</p>	
--	--

上表より明らか通り、「上古期」の期間は「太古」から「秦の一統(統一)」で同一である。しかし、当該時代を「東洋史につきて」では「開化人種膨張時代」、『中等東洋史』では「漢族膨張時代」と名づけている。前者における「開化人種」は、文脈より「支那人種と印度人種」であり、兩種を「東洋文化發達の上に、最も主要なる地位を占むべき二大人種」とする。後者では、「東洋史中一切の事変に於て、最も重要な位置を占むべき」は「漢族」とされ、「印度人種」への言及はない。また、「主要」「重要」とする対象は、前者が「文化」、後者が「事変」であり異同がある³³。後者では印度・支那における「哲学的思想」についての記述も見えない。

(第二)中古期 仏教時代	(第二期)中古期 漢族優勢時代(皇紀四百四十年より千五百六十七年に至る)
上古の終より西暦紀元第十世紀に至る、即支那に於ては、嬴秦の一統より李唐の滅亡に至る間を指	秦の一統より 唐の滅亡に至る、凡そ千

³³ ただし「東洋史につきて」を通読すれば、「事変」へ着目する箇所も見える。例えば「次に東洋史の時代分割に就きて又一言せざるべからず。凡そ社会の事変たる必ず終始因果の関係ありて、決して彼此の間に、画然たる分割を許さずと雖ども、然ども時に或は一大事変の発現によりて、其前後に於ける社会の面目一新することなきにあらず、歴史家は便宜上此の如き事変を標準として、歴史上に時代の分割を設くるものなり。是故に一般歴史に於て時代を分割するに當りては、必ず先づ可及的、其史的団体全部に影響せる事変を標準となさざるべからず。然るに実際に就きて、今日の東洋史なるものを見るに、概して漠然たる時代の分割をなし、上世、中世、近世等の区別も、畢竟鶏肋羊存に過ぎざるやを疑はしめ、其甚しきに至りては、支那歴代朝家の興亡を以て、直ちに時代分割の標準となすものなきにあらず。此の如きは著者其人が如何に、東西の大勢変遷に通達せざるやを自証するものにして、寧ろ始めより何等の分割を設けざるに若ざるなり」(「東洋史につきて」 pp. 15-16)とある。また、「抑々東洋史研究の範囲は頗る広漠たりと雖ども、此間にありて多く主動の地位を占め、事変の中心となりしものは、実に支那人種にして、加ふるに其建国頗る遠く、終始一貫せる歴史を有し、連続不斷の進歩を其間に点出するを以て、吾人研究の次第も亦當に支那を中心として、これと関係ある周囲諸邦国の興亡、諸民族の盛衰如何を考察せざるべからず。従ふて東洋史の時代分割の如きも、大体上支那に於ける大勢の変遷を標準となすは固より反対すべきことにあらず、然どもこれと同時に自余の諸邦国の大勢をも亦多少考察して、若し得べくんば、其史的団体全部に影響せる大事変をとりて、時代分割の基礎となさざるべからず。殊に印度の如きは、其歴史頗る不完全にして、其紀年も亦実に不明瞭なりと雖ども、其文明の東亞諸国に光被せる感化は、時に或は支那に超越する所なきにあざれば、其大勢の変遷の如きも、亦深く参考する所なかるべからず。」(「東洋史につきて」 p. 16)ともある。しかし、表に示した通り、桑原は「所謂支那人種なるもの、勢力、次第に膨張せし時代なり」「哲学思想發達の時代を置くも、亦甚しき大不可なきに似たり」等とも主張している。これは特定の「事変」によって時代区分したのではなく、ある特徴を共有すると見なす期間を一時代として区分したものとすべきであろう。

<p>して、斯に仏教時代と名づく。何となれば後東洋文化の上に一大影響を及ぼし、仏教は、此世期に在りて最其昌熾を極めたればなり。仏教の祖師釈迦牟尼の出世は、前世期に属すと雖、其唱道せし仏教は此世期に至り、摩揭陀国王阿輸迦の尊信を得て、始めて四方に伝播するを得たり。…(略)…次第に其勢を失ひ、十世紀の頃に及びては葱嶺東西の地、遂に殆ど仏教の影を絶つに至れり。支那に於ける仏教は、秦漢の際始めて其国に伝来せしより、後漢、三国、兩晋を経て、南北兩朝、隋唐二代の間に於て、其旺盛を極めたり。所謂支那十三宗なるものは、皆此世期の間に発生し来りしもの、唐末五代に至りては、仏教の勢力漸く否運に傾き、宋元以後の仏教は所謂強弩の末、到底之を以て隋唐の盛時に比すべきにあらず、故に吾人が此世期を限りて、仏教時代となすも、蓋甚しき失当にあらざるべし。</p>	<p>百年間をいふ。</p>
<p>尚此世期に於て注意すべきことは、東洋文化の二大中心たる支那及び印度の国運は、此間に在りて其盛大を極め、支那に於ては秦の始皇が天荒を破ぶりて、鞏固なる中央政府を建設せしが如く、印度に於ても毛利耶家の阿輸迦大王に至りて、始めて印度全体を統一して王家の基礎を固めたり。而して支那人種は西東兩漢及び隋唐の際、西域諸国を羈縻して遠く其国威を輝かし、間と土爾格人種通古斯人種等崛起して、東亜全土を震盪せしものなきにあらずと雖、然れども尚大体上よく其優勢を保てり。印度人種は其政治上の勢力、固より支那人種の如き隆盛を見るを得ざりしと雖、さきには阿輸迦の出づるあり、後には尸羅訶迭多、毘訶羅摩訶迭多の出づるありて、空前の大国を建て、佞令大夏、塞種、月氏、安息、嚙噠等前後其地を侵略せしと雖、印度人種はよく此等の外寇を防ぎて、其独立を失はざるを得たり。要するに</p> <p>此世期は開化二人種の極盛時代と云ふべく、</p> <p>此世期以後に於て、彼等は全く政治上の勢力を失へり。此間塞外諸人種の中に就きては、土爾格人種最得意の位置を占め、匈奴となり、柔然となり、突厥となり、回紇となり、其勢を得るの日は、内外蒙古より天山兩路に跨り、尚、篤蘭斯烏訶薩尼亞の地を併せ、頗る広漠たる領土を奄有せり。</p>	<p>前世期中其勢力を増進し来りし漢族は、秦</p> <p>兩漢時代に於て、優に塞外諸族を圧倒し、</p> <p>五胡十六国の際と雖ども、尚よく之と頡頏し、</p> <p>隋唐時代に至りては、復又空前の大版図を開きしが故に、此間を漢族優勢時代といふも、大不可なきものゝ如し。</p>

「中古期」の期間は、前期の終わりから「(李)唐の滅亡」までであり、同一である。しかし、当該時代を「東洋史につきて」では「仏教時代」、後者では「漢族優勢時代」と名づけている。ただし前者も叙述中には「開化二人種の極盛時代」という表現が見え、後者の「漢族優勢時代」と類似する点もある。しかし、後者は「開化二人種」即

ち「支那人種と印度人種」はなく「漢族」に限っている等の異同がある³⁴。また、前者に見られる仏教の展開についての叙述は、後者に見られない。仏教叙述の消失は、上古期で「主要」「重要」の基準を前者が「文化」、後者が「事変」としたことと、軌を一にするものであろう。また、後者にはインドへの言及はない。

(第三)近古期 蒙古 時代	(第三)近古期 蒙古族最盛時代(皇紀千五百六十七年より二千二百七十六年に至る)
<p>中古期の終より第十六世紀の初に至る五百年間を指す、即ち支那にては五代より明の中葉に至る間を云ふ。此世期に於ては、東洋文化の中心をなせし、支那、印度兩人種の勢威全く沈降し去り、支那人種は終始通古斯人種たる、契丹、金の為に其辺塞を侵され、印度人も亦「ガズニ」「ゴール」王家以来、常に土爾格人若くは阿富汗人たる、回教徒の為に其王位を篡はれり、かく支那、印度兩人種が其勢威を失ふ時に際して、蒙古人種は漸く其故郷地たる、外蒙古肯特山下より勃興し来り、 東西両亜細亜を席捲し、余威遠く歐洲大陸に及び、元朝は一旦瓦解せしも、未だ幾ならずして帖木兒帝国起りて、葱嶺以西の地を併吞せり。 要するに此世期は実に蒙古人種極盛の時代にして、彼等は東洋否世界の大舞台に於ける、あらゆる事変の主動者となれり。</p>	<p>五代より 清朝の興起に至る、凡そ七百年間を指す。 此世期に於て、 漢族 の気焰全く沈降し、 塞外諸族は次第に勢を得、通古斯族先ツ興り、 尋で蒙古族興りて元朝を建て、東方亜細亜を統一し、更に中央亜細亜を経て、西、北両亜細亜を席捲し、余威遠く歐洲大陸に及びべり。元朝は一旦瓦解せしも、未だ幾ならずして、帖木兒帝国興りて、葱嶺以西の地を併せ、終りに莫臥兒帝国興りて、印度を統一せり。要するに此世期は、蒙古族極盛の時代にして、彼等は東洋否世界に於ける、一切の事変の主動者となれり。故に此世期を蒙古族最盛時代といふべし。</p>
<p>尚此世期に就きて注意すべきは、印度に於て前世期に流行せし仏教の反動として、然も其影響を受けたる、新印度教の次第に勢力を得たりしが如く、支那に於ても亦仏教に反対し然も其影響を受けたる宋学興起して、次第に仏教の勢力を滅殺せり。</p>	

「近古期」の期間は一致しない。「東洋史につきて」では「中古期の終より第十六世紀の初に至る五百年間を指す」、『中等東洋史』では「清朝の興起に至る、凡そ七百年間を指す」とする。五代から「第十六世紀の初に至る」までは約六百年であり、「五百年間」は誤である点は措くとしても、前者と後者では近古期に百年の異同がある。なお、前者にも叙述中には「蒙古人種極盛時代」という表現が見え、後者の「蒙古族最盛時代」と類似する点もある。しかし、両者に見える五代以降の「通古斯族」

³⁴ 前掲傳「中国歴史分期之研究」(1918. 4. 18)は、桑原の時代区分に異見を示すに際して、その「漢族」理解について「中国歴史上所謂「諸夏」『漢族』者。雖自黃唐以來。立名無異。而其間外族混入之跡。無代不有。隋亡陳興之間。尤為升降之樞紐。自漢迄唐。非由一系。漢代之中国。与唐代之中国。万不可謂同出一族。更不可謂同一之中国。取西洋歴史以為喻。漢世猶之羅馬帝国。隋唐猶之察里曼後之羅馬帝国。名号相行。統緒相伝。而実質大異。今桑原氏泯其代謝之跡。強合一致。名曰『漢族極盛時代』。是為巨謬。『説詳次節』其弊二也」と見解を示している。

の活動は蒙古族の「最盛」とは直接の関係はない。また、後者が言及するムガル帝国は16世紀の創始、清は女真族が建てたものであって、これも蒙古族の「最盛」とは直接の関係はない³⁵。両者ともに標榜する所とは異なる基準によって、時代を区分したと考えざるを得ない。なお、「近古期」においても、宗教・学術については前者のみにみえ、後者には見えない。また、後者ではムガル帝国を除いて、インドへの言及はない。

(第四)近世期 東西両洋交渉時代	(第四)近世期 欧人東漸時代(皇紀二千二百七十六年以後)
<p>第十六世紀の当初より現今に至る、</p> <p>此世期に於て歐洲の海上探險は頗る其隆盛を極め、千四百九十七年には葡萄牙の探險船印度に來り、尋で千五百十七年には支那沿岸に漂着し、斯に始めて東西交通の端緒を開きて、</p> <p>兩洋の關係は次第に頻繁を加へ、</p> <p>通古人種は支那を一統して清國を翊め、蒙古人種も亦一時印度を征服して莫臥兒帝國を建てしと雖、幾ならずして南方亞細亞は已に 英人の手に落ち、中央及び北方亞細亞は、頗る魯人の略す所となり、此の如くして阿利安人種は次第に其翼を東方に張り、東洋の大勢は多く彼等の左右する所となれり。</p>	<p>清初より現時に至る、凡そ三百年間、之を欧人東漸時代と云ふべし。</p> <p>前世紀の終より、歐洲人士の東洋に遠航する者漸く多く、</p> <p>其ノ始めて東西交通の端緒を開きしが、此世期に至りて、政治上に於ける 兩洋の關係は、次第に頻繁を加へ、</p> <p>南方亞細亞は已に殆ど全く英人の手に歸し、中央及北方亞細亞は、魯人の蚕食する所となり、此の如くして阿利安人種は、次第に 東方亞細亞の大勢を左右するに至れり。</p>

「近世期」の期間もまた、「東洋史につきて」と『中等東洋史』では一致せず、前者では「第十六世紀の当初より」始まり、後者では「清初」即ち17世紀より始まる。前者が挙げる「千四百九十七年には葡萄牙の探險船印度に來り」は、ヴァスコ＝ダ＝ガマの出港と翌年のインド上陸、「尋で千五百十七年には支那沿岸に漂着し」は、同じくポルトガル人のマカオ上陸を指すものであろう。前者が近古期・近世期の画期を「第十六世紀の(当)初」とするのは、インドだけではなく「支那沿岸に漂着し」た件を以て「東洋」における「東西交通の端緒を開」いたとみなしたものであろう。ただし後者も「前世紀の終より、歐洲人士の東洋に遠航する者漸く多く」と記し、「清初」より前の東西交通に注意は払っている。にもかかわらず、後者が標榜する基準に反して「清初」を画期としているのは、注目すべき点である。また、前者と比して後者ではインド関連叙述が少ない。また、アリア人種の影響について、前者は「東洋の大勢は多く彼等の左右する所となれり」とするのに対し、後者は「東方亞細亞の大勢を左右するに至れり」と記し、影響の範囲を「東洋」ではなく「東方亞細亞」に限定する。これは、東洋史の対象範囲を「主として東方亞細亞」と規定したことに照応するもの

³⁵ 桑原も『中等東洋史』総論第三章「人種」において、ツングース族中に「宋代の女真等は皆此族に屬し、当今の清朝も亦此族より興りて、支那を一統せり」(p. 16)、蒙古族中に「印度の莫臥兒帝國も亦、此族の建設する所に係る」(p. 17)と記している。

であろう。

以上、「東洋史につきて」『中等東洋史』が示す時代区分の取扱いを比較すると、名義に異同があるにも関わらず、上古・中古の期間は両者ともに同一であり、逆に、時代区分の名義はほぼ同一であるにも拘わらず、近古・近世はその期間に異同がある。こうした点を考慮すると、時代区分に際して示す名義が時代区分の基準であると断定することはできない。「漢族膨張時代」等の名義のみに着目し、「表現が示しているように」「民族の盛衰が指標とされている」等と論じるのは失考である。加えて、両者ともに、解説で標榜する基準が、時代区分において貫徹しているとも考え難い。例えば前者の「近古期 蒙古時代」は「支那にては五代より」始まるとする。しかし、モンゴル勃興より前のツングース族の活動も、この時代を含めている。また、例えば後者の「近世期 欧人東漸時代」は「清初」より始まるものとし、他方で、前世期には既に「欧洲人士の東洋に遠航する者漸く多」い旨を記している。標榜する基準に所に従えば「東洋史につきて」と同様に明朝中に画期を設けるべきを、基準に反して明・清の王朝交替期を画期とする時代区分を採用していることが明らかである。両者の時代区分は、桑原自身も述べるとおり、便宜的・暫定的なものにすぎないと見なければならぬ³⁶。なお、後者が、インドをほぼ考慮の埒外に置き、仏教を含む文化・学術について等閑視する点も、異同として指摘できよう。

おわりに

以上、「東洋史につきて」『中等東洋史』が示す中等東洋史構想について、主として中央アジアの取扱いと時代区分とについて、検討を試みた。「東洋史につきて」に示された構想は『中等東洋史』に直接受け継がれていない。両者を比較すると後者では、東洋史の対象範囲を「主として東方亜細亜」とし、東方アジアと南方アジアとの「唯一の連鎖」としての中央アジアの意義は相対的に見れば軽い。加えて、時代区分においてもインド・仏教等を考慮の埒外におく傾向が見られる³⁷。また、両者ともに

³⁶ 前掲傳「中国歴史分期之研究」(1918. 4. 17)は「且如桑原所分。尤有不可通者二端。一則分期標準之不一。…(略)…凡為一國歴史之分期者。宜執一事以為標準。此一事者。一經拋為標準之後。便不許復拋他事。別作標準。易詞言之。拋以分割一國歴史時期之標準。必為單一。不得取標準於一事以上。…(略)…今桑原氏之分期法。始以漢族升降為別。後又以東西交通為判。所拋以為(分本)者。不能上下一貫。其弊一也」と、『中等東洋史』の時代区分を問題視している。しかし、前掲『中等東洋史』総論第四章「時代の分割」は「歴史家は便宜上、此の如き事変を標準として、歴史上に時代の分割を設く。然るに東方亜細亜の地たる、…(略)…同一の史的団体に属する邦国と雖とも、其彼此の關係は頗ル親密を欠くもの多く、従うて時代分割の上に、不便を感ずることも亦少からず。今姑く…(略)…四期に分つべし」(p. 18)と記している。「便宜上」から行う時代区分において、また、「標準」により時代分割を行うに「不便を感ずることも亦少から」ざる場合において、「今姑く」の暫定的時代区分が「分期標準之不一」であることは、「弊」とは言えまい。

³⁷ 梁は、前掲『東籟月旦』において『中等東洋史』と「其余参考書」を評した上で、高桑駒吉の未刊行の講義録に言及し、「此書以中国印度為主。…(略)…待其完成。或可為東洋史中第一位乎」と(pp. 98-99)評している。「東洋史につきて」を講読していたかは未詳ながら、『中等東洋史』もまたインドを軽

時代区分は標榜する通りに行われているとは限らず、「漢族膨張時代」等の名義は構想の一端を示すこともあるに過ぎない。両者を史料として用いるに際しては、標榜する所のみならず、歴史叙述・構成等を具体的に検討することも、併せて行うべきであろう。また、桑原の当該時点での構想が単純に整理叙述されている著述ではないことも、踏まえるべきである。両者ともに、桑原の東洋史観を反映している点もあることは否定し得ない。しかし、前者は既定の東洋史を「循奉」するための種々の考察を示しており、後者は那珂の校閲を経て教科用図書としての刊行された編著である。史料として用いるに際しては、それぞれが異なる背景を有することを踏まえた批判が必要である。無批判に主張に援用することは、歴史研究では避けなければならない。

本稿は、「東洋史につきて」『中等東洋史』が示す中等東洋史構想を比較検討したものであって、これら構想が『中等東洋史』や後の東洋史教科書にどのような影響を与えたかについては、別途検討を要する。今後の課題としたい。

んじている面があることを看破した評と言えよう。梁は先に「日本人所謂東洋者。對於秦西而言也。即專指亞細亞洲是也。東洋史之主人翁。實惟中国。故凡以此名所著之書。率十之八九紀載中国耳。故今兩者合論之」(p. 98)と記している。高桑の講義録は、「主人翁實惟中国」ではない「東洋史」ということになる。中国における東洋史観を検討する上でも、考慮すべきものがある。なお、前掲傅「中国歴史分期之研究」(1918. 4. 17)は、桑原の時代区分を論ずるに際して「桑原氏書。雖以中華為主体。而遠東諸民族。自日本外。無不繫之。既不限于一國。則分期之誼。宜統合殊族以為斷。不容專就一國歷史之升降。分別年世。強執他族以就之。所謂漢族最盛時代。蒙古族最盛時代。歐人東漸時代者。皆遠東歷史之分期法。非中国歷史之分期法」と記し、その時代区分は「以中華為主体」しているが「非中国歷史之分期法」とみなしている。